

(社会科)

考えを伝え合い、深め合う子どもを育てる ～問題解決的な学習を通して～

大阪市立下新庄小学校 前木場亜希子 小林聖千栄

1. 研究主題設定の理由

本校の児童は、明るく素直で何事にも興味・関心をもち、課題に向かって取り組むことができる。しかし、自分の気持ちや考えを適切に表現したり、伝えたりすることには課題があった。そこで、平成 26 年度より研究教科を社会科とし、平成 27 年度までの 2 年間、主題を「自ら考え、表現する子どもを育てる」と設定し、社会科の問題解決的な学習を通して、みんなで考え、話し合い、思いや考えを練り合い、学んだことをもとに自分の考えを表現できる力の育成に取り組むことにした。

そして、研究を進めた結果、次のような成果がみられた。

- ・与えられた課題に対して、解決方法を考えることができるようになってきた。
- ・進んで調べようという学習態度が身に付いてきた。
- ・自分の思いや考えを言葉で表現することができるようになってきた。

しかし、今後の課題として、学習で得た知識を活用し、友だちの考えと比較しながら、自分の考えをさらに深めるまでには至っていないことがあげられた。

そこで、本年度は、昨年度までの研究の成果を引き継ぐとともに、自分の考えを深め、思いを交流する中でさらによりよい考えや思いに高めていくことができるように、主題を「考えを伝え合い、深め合う子どもを育てる」と設定し、研究を進めることにした。

2. 研究の趣旨

子どもたちが社会的事実をしっかりと見つめ、思考・判断し、表現することができるような実践を進め、子どもの主体的な問題解決を協働的な学びの過程を通してより確かなものになりたいと考えた。子どもが意欲をもち、社会的事象の意味を追求し、社会的事象を身近な問題と捉え、自分のこととして考え表現し、自分の考えをしっかりと構築した上で、友だちの考えと交流することによって、「伝え合い、深め合う」ことができると考えた。そして、研究の視点を設定し、研究授業・研究討議会を通して実践を重ねた。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点 (1) 問題解決的な学習の工夫

- ・ 1 時間の学習過程を「つかむ」「調べる」「考える」「まとめる」という 4 つの段階の流れに沿い、子どもの問いや意識の流れを大切にしながら問題解決を通して学習が展開できるようにする。
- ・ 子どもが学習意欲をもって活動に取り組むように、それぞれの段階での指導を工夫し、子どもの思考力・判断力・表現力を育てる。

視点 (2) 「考える」段階における話し合い活動の工夫

- ・ 調べたことをもとに自分の考えが発表できるように、「2 人で話し合う」「グループで話し合う」「全体で話し合う」など、話し合いや発表の場の設定を工夫する。
- ・ 子どもの考えを揺さぶり、多くの子どもから多様な発言を引き出せるような発問を工夫する。

視点 (3) 子どもが楽しく活動するための学習の工夫

- ・ 体験的な活動を学習に位置付け、「なぜ」「なるほど」「次は」「どうなるのだろうか」などの予想や知的好奇心を喚起し、学習意欲の向上を図る。
- ・ 実物や具体物、資料の提示・ICT 機器の活用・社会見学・ゲストティーチャー等の招聘により、社会的な事象との出会いを大切に、達成感や成就感を味わうことのできる教材の開発に取り組む。

視点 (4) 学んだことを豊かに表現する方法の工夫

- ・ ノート指導の徹底、ワークシートの工夫により自分の考えをまとめたり、友だちの考えを

参考に自分の考えを見直したりすることによって、考えを深めることができるようにする。

- ・ 調べ学習の方法や発表の仕方を学び、自分の思いや考えをわかりやすく伝えたり、多様な方法で表現したりすることができるようにする。

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- 1時間の学習過程を「つかむ」「調べる」「考える」「まとめる」の4段階に分け、子どもの自然な思考の流れを意識した学習を展開することにより、子どもが主体的に考え、自分の考えを表現することができるような問題解決的な学習を行うことができた。
- ペア学習やグループ学習を多く取り入れたことで話し合うことへの不安を減らし、友だちの多様な考えに気づき、調べたことをもとに自分の考えを振り返ることができるようになってきた。

子どもの思いや考え、疑問を引き出し、より深く考えることができるような発問を工夫することが大切であることもわかった。

「考える」段階での話し合い活動が活発になったことで、「まとめる」段階では、みんなで話し合ったことをもとに自分の考えをまとめ、自分の言葉で表現することができるようになってきた。

- 「大阪市のようす」では、実際に大阪環状線を1周したり空中庭園から大阪市をみわたしたりするなど、体験的な活動を行った。「昔のくらし」では、昔の道具の実物を見たり、「包丁づくりのさかんな堺市」では、伝統工芸士の方にゲストティーチャーとして来ていただいたりするなど、具体的な体験ができるようにすることで、学習意欲を向上することができ、学習問題を自分にひきつけて考えることができた。

また、体験的な活動だけではなく、ICT機器として「タブレット」「大型テレビ」などの活用も、子どもたちにとってわかりやすい資料の提示や問題解決への学習意欲を高めるのにたいへん効果的であった。

- 4段階の「思考の流れ」を大切にしたいノート指導を徹底し、継続指導を行うことで子どもたちが自分の考えをしっかりと表現することができるようになった。また、子どもたちの考えを子どもたちのノートから見取り、評価に生かすことができた。

また、発表については、話型を教室に常時掲示することで、話すのが苦手な子どもも自信をもってみんなの前で話すことができるようになってきた。

(2) 今後の課題

- 子どもの思考の流れを中断させることなく、思考をより深めていくための、資料の内容・提示方法など、さらなる工夫が必要である。
- 「つかむ」段階や「調べる」段階で時間がかかってしまい、「考える」段階で十分な時間が取れないことがあった。「調べる」段階での資料の精選と「考える」段階での話し合い活動を活発にするための学習計画を工夫する必要がある。
- 「調べる」段階から「考える」段階へ、子どもの思考の流れを中断させることなく、考えをゆさぶったり、思考をより深めたりできるような発問の工夫をさらに研究していかなければならない。
- ICT機器の活用は子どもの学習意欲を高めるのに効果的であるが、情報量が多くなると、どこに着目すればよいのかわからなくなってしまうことがある。見る視点を明確にしたり、資料を精選したりして、ICT機器の活用を進めていくことも大切である。また、ICT機器を活用するだけではなく、従来の教材・教具も情報活用的手段として位置づけ、それらをうまく使うことも必要である。
- 授業中のノートやワークシートと発言の内容や、子どもの作品(新聞・年表・パンフレット・ポスター)などが、単元ごとに作成した評価規準に達しているのかについて主に評価したが、より具体的なわかりやすい評価についての研究も進めていかなければならない。